

## (2)高橋保子研究員による考察

低年齢児の保育は、危険だからあるいは難しいから、そして施設が充実していないから、などと敬遠されてきたが、ここ数年来、特に乳児の保育需要が高くなり、行政からの指導もあり全国的に受け入れるようになった。

この調査の実施状況を見ると、全国平均 96.7%と短年で実施が加速されてきていることが分かる。そんな状況の中で乳児保育の現場の実情について、分析しながら感じたことを述べてみたい。

### 1. 遊びの設定について

子ども本来の育とうとする姿は、見えるもの聞こえるものに関心を抱き、乳児期前半からすでに自己を発揮し遊び始める様子が見られるようになる。

遊びの設定は、その子どもたちの月齢や育ち具合によって関心を持つものが違ったり、具体的に手に持って遊べるなど、運動機能の育ち具合でも必要とする玩具や場の環境は変わる。

短期間に著しい発達を遂げる乳児保育の現場では、日々の育ちを捉えて準備する必要がある。集団の場であることから個々の子どもの発達をしっかり把握して、その子どもたちが自主的に動きだせるよう配慮した環境を準備する保育姿勢は重要な視点になる。

全国の9割以上の保育所が乳児保育を実践している様子を見て、乳児保育を敬遠してきた経過から考えると、世相の変化に真剣に対応している保育現場の様子が伺える。

発達に合わせて環境設定するのは自然であり、発達に合わない環境では子どもたちが自主的に遊べなくなり、自ら遊びに挑めない不快感から、特に大人の手を必要とするような不機嫌な様相に至ってしまう。保育士との情緒的なつながりは遊びへの意欲の源になるので、保育環境の要因としては第一条件になると思われる。

子どもの状態や季節によってその日その日の遊びを臨機応変に設定しているとの回答は 26.8%ある。このような視点も大切にされなければならない。「保育士との情緒的なつながりを基盤として発達に合わせて遊びを設定する」の要件を満たした上での配慮であればさらに望ましく、一人ひとりの育ちをしっかり見ていける保育になると思う。いずれも重要な設問なので、選択肢一つを選ぶについては回答に迷われた施設もあるであろう。

保育指針に沿って年齢に合わせて遊びを設定するには、問の内容が大きすぎたのかもしれない、直接的ではないが基本的には発達期が明記されており、結果として保育指針に基づくものになるものと考えられる。

「乳幼児は生活が主なので特別意識した遊びの設定はしない」は、3.1%である。

乳児期の保育には、人間形成の上で最も丁寧な関わりを重要視している立場から、数字の少ないのにはホッとしたところである。確かに生活が主であるけれども、日々の生活の中にも生きること、育つこと、どちらも切り離せない大切な一日の生活のポイントがある。

「預かるけれど一日無事であれば」程度の保育感覚では十分ではない。近畿地区、九州地区の町・村はまだまだ案じられる状況である。

## 2. 玩具の選択について

「玩具の特徴や保育効果を十分に考慮した上で与えている」と、約 5 割の保育所がこの方法で選択している。特に「職員が話し合っ」という直接の担当者の目で、担当する子どもたちに合わせて保育士が選択できることは、日々の保育の中で保育士が責任を持つ要因としても望ましい。

分析のところでも少し触れたが、材質や安全性を優先的に考慮する方法も欠かせない選択の視点であり、約 4 割の保育所がこの方法であると答えている。特に乳児は何でも口にいたり手に触れて確かめて見る発達段階であることや、危険についても最も予知できない子どもたちであることから、安全性については欠かすことができない条件である。

ここでも、「材質や安全性を優先的に考慮」を踏まえた上で、「職員が話し合っ玩具の特徴や保育効果を十分に考慮」の選択が最善であることを述べておきたい。

「カタログを見て良さそうなものを選んで」は 6.3%である。新製品を取り入れるあるいは玩具の材質を調べるなどの玩具を選ぶ過程で参考にすることは、どの保育所でも考えられる。しかし、前述の内容を踏まえないで単にカタログに頼る選択方法は、子どもたちに必要なそして良いものが選べるのか案じられるところである。都区部・指定都市、小都市 A の公営が二桁台、町・村の公営も比較的に高い。保育現場に関わりの薄い立場の人が記録したのではないかと考えたい。

## 3. 低年齢児の家庭連絡について

「園独自の様式が連絡帳がありますか」では約 9 割の保育所に独自の工夫された様式があることが分かる。各保育園が一人ひとりを大切に、保護者とともに子育てをしているという意識や姿勢を結果として表示していることになる。保護者側からすると自分が見ていない時間帯の我が子の様子を知る貴重な資料であり、保育の情報公開という視点からも、今後は広く要望されることになるろう。

働かなければならない状況にある保護者は、預けることをためらいもするが、現実には自分で育てられない境遇にある人たちが多く、子どもを迎えるや否や連絡帳の文字を食い入るように読む姿をよく見かける。そして両親の思いも記録される育児日誌であったり、不安や悩み事まで書いてあるなど相談日誌でもあり、まさに育児支援の記録でもある。

どのような様式が簡単で要領よく確かな伝達が可能であるのか、試行錯誤しながらも必ず記帳してほしい内容や箇所を、その保育所が使いやすい様式を作っていく傾向は、全国的に広がっていることが分かる。

連絡帳を使用していないことを予想させる未回答が 2.0%あるが、「ない」との回答 9.7%については、園独自の工夫したものはないが、市販のものを利用したり掲示板を利用したり、送迎の際の話し合いが持てるよう配慮するなど、何らかの方法で連絡していることが記述されている。

「ない」の欄を地域区分別表と所在地区分別表で見ると、北信越地区と中国・四国地区の中都市 14.6%、町・村 18.9%の公営に見られる。家庭連絡帳の重要性の意識の低さもあるのであろう、真剣な取り組みや工夫が見られないことになる。

乳児期の子どもたちは言葉やコミュニケーションの手段も発達過程にあり、未発達の部分が多く、

保護者とともに育てるという視点からも双方の大人の配慮は欠かせない。乳児期の保育における連絡は保育所にとって重要な使命でもある。この調査結果は保育所の保育姿勢を読み取る貴重な資料と言える。内容的にはかなり細かく調査しているので、保護者への対応状況が見えてくる。

#### 4. 方法や内容について

「年齢別の様式で」とは、0歳児から2歳児までの発達の特徴を踏まえて、大切と考えられる事項を記入する様式を使っているということである。

産休明けから預かる0歳児には、健康的な生命の維持にかかわる内容や、自らミルクを飲むという行為による口腔内の機能の発達具合など、著しい発達を見せる時期であることから、細かく観察すると毎日丁寧に記録することがらである。1歳児にしても、発語の問題や、自ら着脱をしようとする自我と意欲の問題などは、関わり方による育ちの違いがあることを丁寧に伝える必要がある。日常用語が使えてくる2歳児も、排泄の自立など例をあげると限りないほど伝達事項はある。その意味では、全国の半数の保育所が年齢別の様式で毎日連絡している状況があり、喜ばしい実態を見ることができた。

「0歳児のみ毎日1、2歳児は必要なとき」の保育所もある(24.1%)。伝達の重要性を理解した上での、止むを得ない職員態勢も考えられる。

「3歳未満児は同じ様式で必要なとき」19.0%。「必要なとき」とは、どんな内容を保育士が必要と考えているのかははっきりしないので言い難いところもあるが、健康に関する事項や情緒が安定して遊べていたかどうかなどは、日々欠かせない連絡事項である。

子どもたちを責任をもって預かり、保護者が安心して働けるよう支援する、保育士の業務姿勢について改めて考えたいものである。

保護者も保育園側も忙しく、丁寧に話し合っている時間がない。子どもたちは言葉やコミュニケーションの手段が発達途上にある。しかし、人間にとって最も著しい成長を遂げるこの時期の子どもたちを預かる保育園としては、保護者への丁寧な伝達は期待される役割でもある。

連絡帳の重点項目については、3つまでという選択方法で記録しやすかったのであろう、健康状態91.2%、成長発達の様子49.7%、遊びの様子62.5%、友達や保育士との関わり57.8%と連絡してほしい内容に、多くの保育所が重点をおいていることが分かる。保護者への連絡の意義を理解し実践している実状が明らかになった。

怪我の扱いについては、僅かなかすり傷程度でも預かっている時間内に起きた怪我には陳謝することが大切である。口頭で経過を含む説明が必要であり、双方の信頼を維持するためにも、対話の中で理解していただく方法が望ましい。連絡帳では済まされない問題になる可能性があるであろうが、数値は低かった。

#### 5. 低年齢児の食事について

生後僅か1年くらいの中にミルク(または母乳)から固形食になる乳児期の食事は、個々の子どもの健康状態を見ながら進めなければならないが、ミルクの扱いもそのなかの一つの考え方がある。生後から飲み続けた母乳またはミルクを固形食を十分に食べられるようになり、普通食になるま

で他のメーカーのミルクに変えない方が良いという考え方である。その意味では母親が来園して授乳している方法を、すでに実施している保育所が全国的に約 8 割、健康な子どもに育てるための情報を取り入れていることが分かる。

冷凍母乳については、不衛生になりやすいという考え方や観念的な不安もあるのであろう、比較的少ないことが分かる。

離乳食の開始も体調を見ながら進める、果汁から便の様子と体調を観察し、異常がなければ野菜スープ、そして野菜をペースト状に潰して一さじ、一日に一回程度から始めるのが一般的に知られている方法である。胃腸が健康であれば下痢を起こすこともなく体重を減らすこともないが、むやみに必要量や栄養源としての食事内容を考えると、離乳初期には体調を崩す心配がある。焦らずにゆったりと乳児の気持ちに合わせて、進めることが望ましい。また味覚も敏感であるから、乳児が味わえるよう薄味で食品のもつ味を消さぬよう調理するのも、味覚を大切にする方法である。

食事は必要量摂取できるよう配慮するのは当然であるが、何といても食事中の子どもの食べたいという気持ちが大切である。時間だから、あるいは必要量食べていないからと、無理に食べさせようとするのは、子どもにとって食事は不快なものと思わせてしまい、食事を楽しめない、あるいは時間を要する食べ方になってしまう例は少なくない。大人の一方的な食べさせ方は反省し、乳児の心の負担も考えながらの保育実践を期待したい。

調理に関しては、幼児食の材料を食べやすいように調理したり、青魚の時は白身の魚にしたり、豚肉、牛肉の献立には鳥肉に変えるなど、乳児の月齢を見て変えるなど、丁寧な関わりを読むことができる。

離乳食の進め方には厚生労働省の資料を参考にしている保育所が約半数、家庭の食事に似たものを用意する保育所も見られるが、乳幼児期の食事は、生涯を健康なからだで生活するための、からだづくりの時期であることや、摂取量も少ない子どもたちであることから、少量でも栄養があり安全で消化吸収の良い、鮮度の良い食材を選定する必要がある。

食品が汚染されていたり、調理の段階で不潔な状況があると、小さな命を譲ることさえ難しくなる。食品選びも既成の食品には添加物が多く含まれているので、厚生労働省の進める食品をできる限り加工していない食品を選び、手を掛けて、離乳食などは乳児が喜んで口に入れる味で、食べやすい調理の方法が重要になる。

丸まると肥った乳児が歩き始めて、ようやくぶよぶよの筋肉が整ってくる自然の育ちが見受けられなくなっている。痩せ形思考も考えられないわけではないが、乳児期に与える食品に問題はないのか案じられるところである。

さまざまなアンケート内容を読んで、未回答の数字が多いのには驚いている。

あえて未回答を掘り下げてみたい。

所在地区分	調整乳に切り替え		母親が来園して直接授乳		冷凍母乳に対応		離乳食	
	公営	民営	公営	民営	公営	民営	公営	民営
都区部・指定都市	24.6%	9.8%	7.1%	0.0%	14.3%	5.1%	23.0%	10.9%
県庁所在市	31.6%	2.9%	0.0%	2.7%	7.1%	5.4%	26.3%	3.8%
中都市	31.3%	4.4%	0.0%	2.8%	0.0%	2.8%	25.0%	4.4%
小都市A	28.6%	7.1%	11.1%	9.4%	18.5%	3.1%	26.8%	7.9%
小都市B	27.8%	1.8%	11.8%	5.0%	11.8%	5.0%	31.5%	3.6%
町・村	43.6%	8.4%	14.3%	2.6%	14.3%	0.0%	43.2%	3.8%

設問内容の理解度の問題であるのか、アンケートに対して不真面目なのか。考えたくはないが乳児保育の実践自体が曖昧で書けない実態があるのか不透明である。

#### 〈自由記述から〉

この調査では、乳児の保育を積極的に取り入れるよう保育環境が用意されて、働く親たちを支えている様子を読むことができるが、乳児が人らしく育つために、あるいは子どもにとっての最善の方法を考慮した上で、保育所の乳児保育を肯定した判断で実践している場合と、不本意ながらという、預かる側の心境を垣間見る記述がある。

- ・長時間利用する子は、不安定な子や噛み付きが多いように感じている。
- ・月齢が低いほど、担当保育士の後追いをする。
- ・保護者との連絡は密にしているが、遅く迎えが来る子どもが不安を感じないように努力している。
- ・長時間の園児が非常に増えてきて、職員の対応が難しく(勤務時間)、パート職員が増力目している。
- ・ニーズに応えるべく努力したいが、長時間保育による子どもの負担という点では、食事の面だけを見ても問題がある。子ども一人ひとりのきめ細かい対応ができることが望ましい。
- ・乳児はできるだけ同じ保育士が保育することが望ましいが、現状では、長時間保育をすることにより、保育士の時差出勤や代休等による職員数の減等から、乳児への安定した個別保育ができていない。
- ・低年齢児で保育所に預けられる子どもは、ほとんどが7時30分くらいから18時までの保育時間である。
- ・この年齢は親子関係が大切ということを常に思い、親と対応している。長時間保育は親の事情をしっかりと聴いている。
- ・せめて、0歳から2歳までくらいは母親の手で育てることができれば子どもは幸せだと思う。しかし、母親が孤立感や情緒不安による子育て不安が強ければ、子ども自身は幸せにつながらないとも考えられる。
- ・乳幼児の長時間保育は、子ども自身の負担も多く基本的には賛成できない。子育ては社会全体の仕事だから、親の労働条件改善等の施策に国が積極的に取り組むべきだと考える。

- ・乳幼児を育てながら働いているお母さんの労働時間は短くしてほしいと思う。本当に家族で夕食を囲めるような時間に帰宅できる労働環境でないと、子どもたちが健やかに育つのは難しいと思う。
- ・11 時間を越えての開園時間を実施しようとするれば、保育士配置人数が最低基準の 1.5 倍くらいの職員数を確保する必要がある。職員の労働時間を割り、子どもたちの心身の安定を図ろうと思えば(特に低年齢児になればなるほど)、職員の数と単に数だけではない保育者の質(経験や研修)が問われているだけに、保育単価の増額や補助金を増やすなど、財源の確保がなければ子どもたちの豊かな育ちは守れないと思っている。
- ・現在、保育園は保護者にとって利用しやすい、いろいろなサービスが整っている園が「良い」とされているが、それは、保護者にとって都合がいいのであって、果たして、子どもにとってはどうかということは今一度考えないといけないのではないか。

保育条件は万全ではないが精一杯需要に応えるべく、できる範囲の知識や善意の配慮で子どもたちを護っている、というのが現状のようである。

#### ーまとめー

保育所は、乳児院のように医師が常駐ということでもない。生後 43 日目の乳児から預かるのは確かに度胸がいる。物ではないので、失敗したら同じ子どもを返せないという恐怖感もある。

保育所側では、自分の子どもを育てた経験のある保育士がいるから、ニーズの理解があり、働く母親たちを支援したいから、行政からの指導でなどなど、乳児保育開始には、それぞれの理由であろうが、命の重みを考えると、そう簡単に踏み切れない実態もあった。

過去に事故の発生率も高い乳児の保育、保育士の医学知識や看護的な視点、例えば、具合が悪い子どもに気付かずに寝ているとしか考えなかったケース、乳児の動きを想定できず事故に至るケースや、保育士の人間性が事故を予知できないケースもあった。しかし、現実には預からざるを得ない時代である。

子どもたちは元気に、自ら遊ぶ中で心も体も育っていくものであるが、乳児は楽しく遊ばせられれば良いというものでもない。専門的な知識を得るために、保育士は保育現場の経験を重ねるうちに、改めて人間のからだの仕組みを学び、酸素を吸う意味から学び、生きている状態を改めて考えてみる。そして乳児の生理学や病気の看護的関わりについて学ぶ必要があるであろう。

保育現場では、現任訓練の意味も含めて、良い指導者のもとで子育てポイントを学べる保育経験を積むことが望まれる。

最後に、0 歳児期にその子どもらしさがはっきり見えてくる意味で、乳児の表情や仕草を見て乳児の心を感じる保育士の感性と、応答的な自然の関わりが可能な姿勢を、乳児担当の保育士には最も大切にされなければならないことを強調したい。

そしてその感性をベースに、健やかな育ちを求めての発達期を丁寧に捉えた保育計画を実施するが、看護的な視点を持つことも、命を大切にす意味で欠かせない知識といえる。当面は看護婦が同室で乳児の保育に携わることが望ましいであろう。